

聖書日課 『からし種』 2026.3.15－3.22

<p>3月15日 (日) 民数記 19章</p>	<p>「それらの汚(けが)れたもののためには、罪の清めのために焼いた雌牛の灰の一部を取って容器に入れ、それに新鮮な水を加える」(17節)。荒れ野でありにも近い「死」への恐れを「汚(けが)れ」と呼び、特別なモノと儀式で恐れを克服するしかなかった私たちの解放のため、主は「十字架をしのび、死にて死に勝ち、生きて生命を人にぞたもう」(新生240)。</p>
<p>16日 (月) 民数記 20章</p>	<p>「共同体全体はアロンが息を引き取ったのを悟り、イスラエルの全家は三十日の間、アロンを悼んで泣いた」(29節)。モーセの姉の預言者ミアムと、兄の大祭司のアロンが死に、ことあるごとに「モーセとアロン」に抗議をぶつけてきた民もアロンとの別れを悲しんだ。主の民の世代交替が進む中、ひとり残ったモーセは自分はいれない地へ会衆を導き続ける。</p>
<p>17日 (火) 民数記 21章</p>	<p>「彼らはそこからベエル(井戸)に行った。これは、主がモーセに『民を集めよ、彼らに水を与えよう』と言われた井戸である」(16節)。民が自分で井戸を掘るために集められた。泉に導かれるのでも、モーセの杖で岩から水を出してもらうのでもない。約束の地は近い。しかし、それは土地を奪うための絶え間ない戦いと、偶像崇拜の強力な誘惑の始まりともなった。</p>
<p>18日 (水) 民数記 22章</p>	<p>「モアブは...ミディアン人の長老たちに『今やこの群衆は、牛が野の草をなめ尽くすように、我々の回りをすべてなめ尽くそうとしている』と言った」(3-4節)。旧約の民が荒野の様々な困難を乗り越え、ここまで主に導かれてきたことに驚嘆する。しかし先住の人々にとっては、恐ろしい勢いで自分たちの住まいに迫り、生活を脅かす侵略者であったことも知る。</p>

聖書日課 『からし種』 2026.3.15－3.22

<p>19日 (木)</p> <p>民数記 23章</p>	<p>「バラクはバラムをピスガの頂の見晴らしのきく所に連れて行き、そこに七つの祭壇を築き、どの祭壇にも雄牛と雄羊をささげた」(14節)。高い所に祭壇を築きいけにえをささげる宗教行為は広く行われていたようだ。その中で、旧約では自分たちの信仰の対象がブレないように、レビ記のように詳細なささげものの規定、祭壇の場所の限定が記されたのだろうか。</p>
<p>20日 (金)</p> <p>民数記 24章</p>	<p>「エジプトから彼らを導き出された神は／彼らにとって野牛の角のようだ」(8節)。前章から繰り返される、旧約の民への祝福の言葉。同時に、この「角」がなければ民にはなんの力もないことが示唆される。旧約の祝福は、民が主に従うからこそ得られる契約。次章で旧約の民は圧倒的な偶像への誘惑に揺らぎ、祝福は死と共同体内部での殺戮へ暗転する。</p>
<p>21日 (土)</p> <p>民数記 25章</p>	<p>「彼と彼に続く子孫は、永遠の祭司職の契約にあずかる。彼がその神に対する熱情を表し、イスラエルの人々のために、罪の贖いをしたからである」(13節)。この約束は誰のためか。神に背く者を殺すことが「神に対する熱情」ではないはずだ。真の「永遠の祭司職」は十字架の熱情(パッション)で人の罪を贖われたイエス・キリストにこそふさわしいと信じる。</p>
<p>22日 (日)</p> <p>民数記 26章</p>	<p>「彼らのうち、ただエフネの子カレブとヌンの子ヨシュアを除いて、だれも生き残った者はなかった」(65節)。いよいよカナンの地に入らんとしていたイスラエル。そこには民数記 14 章で不信仰を厳しく問われた長老たちの姿はなかった。主の御言葉を「信じ、従いきる！」ことはなんと難しいことか。しかし、信じ切れないわたしのために、主は十字架に向かわれた。</p>